

# 大東ふれふれ帳

(9)

## 心意気、市民まつり

「祭」が「政」であった。「お祭り広場」では朝市が古代から、農耕、信仰、修威勢よく、金魚すくいや乗鞍等、時代の背景による様々な祭りが伝わっている。柳田国男は「日本の祭り」の重要な変り目として、近世信仰を共にしない人たちが見物という参加で祭りは大きく変わり、更に戦後、信仰を共にしない人たちが集まる「共同体」の祭りが次第に増え、一つの目的に向って参加することの連帯と、群としての興奮を体験する楽しい機会であるといっている。

さて夏の市民まつりは、疫病除けに盛大な「夏祭り」を行った古事に一派通じる面もある。華麗な「ダンシリ」の鉦太鼓が勇壮に響きわたり、

「お祭り広場」では朝市がまさに市民会館内は、文化萌ゆるにぎわいにあふれている。お祭りギャルと消防音楽隊の先導で、ツーヤングからアダルトまで市民スター「連」がひきも切らず、団体ごとにならわが舞い、パトロンが空にひるがえる。婦人会や子供みこしのエネルギーギッシュな動きに圧倒される中、大きな拍手が夏空に広がって「時間よとまれ」と言いたくなる位、見事な「パレード」である。涼風が吹き抜ける夕方、会場の提灯に一齐に灯が入り、肩車の親子や、浴衣姿等、いつの間にか、周りはびっしりの人垣である。待望の「くじ引き」に歓声が

あがる。盆踊りの音頭がひととき大きく音曲の調子よろしく、あとはもうそれぞれの好みの浴衣を着流した市民の踊りの渦がまいて、そこはもう夏の夜の一大パレードである。まつりのキーポイントは、それぞれの心の問題が問もなくやって来る。演ずる人と見物する人々との間の底でつながる強

い連帯感が大きな支えになっている。

一人ひとりの潜在的な「力」の輝きを取り戻す「まつり」の躍動感を「心意気」と言うならば、なんと生き生きとした我が町の「まつり」であろう。

みんなの「市民まつり」が問もなくやって来る。文・川西恵美子



浴衣姿でパレードに参加の婦人たち。市民の一人ひとりがまつりを盛り上げる